

「恐怖はどこにでもある」：イスラエル政府、国内反対者への恐怖の弾圧

イスラエルによるガザでの大量虐殺が続くなか、ネタニヤフ政権は内部からの反対派に対するファシスト的弾圧に転じた。

The Real News の Marc Steiner Show, 2023年11月14日

司会：マーク・シュタイナー

語り手：オーレン・ジヴ（イスラエル人フォト・ジャーナリスト）

リア・タラチャンスキー（元イスラエル入植者。映画製作者）

脇浜義明訳、田中一弘・大賀英二補訳 *脚注はすべて訳注



血で覆われたイスラエル国旗とイスラエルのベンジャミン・ネタニヤフ内閣総理大臣のステッカー。これは、2023年11月04日の10月7日のハマス攻撃の際のイスラエルの失敗の責任があるとして、ネタニヤフの **resignation** を求める抗議行動の中で見られた。ガザに残っている人質の家族や友人の中には、パレスチナ人捕虜と交換するよう政府に求める者もいる。Photo by Amir Levy/Getty Images

ハマスのアルアクサ洪水とそれがもたらした結果によって、イスラエル社会は内部から揺れている。ネタニヤフ政府はガザに対して残酷な集団懲罰を行っているが、何故政府がハマスの人質になった国民を早急に解放させる方策を考えないでもっばらパレスチナ人虐殺に血眼になっているのかを訝しく感じている国民が増えている。政府のやり方への反対が広がる気配に対して、反対を声に出す人々を抑圧するファシスト的方法を取り、言論の自由を事実上なくし、政府に反抗する者を逮捕している。これに関してイスラエル人フォト・ジャーナリストのオーレン・ジヴ（Oren Ziv）とイスラエル人映画製作者リア・タラチャンスキー（Lia Tarachansky）が、リアル・ニュースの番組マーク・シュタイナーが司会するネット番組で話し合った。

マーク・シュタイナー：リアル・ニュースのマーク・シュタイナー・ショーによるこそ。皆さんとご一緒出来て光栄です。この番組ではイスラエルとパレスチナでの闘争に参与している人たちとの対談を続けています。本日は現在進行中のガザ戦争に関して二人のイスラエル人に話してもらいます。リアル・ニュースを聞いていらっしゃる方はリア・タラチャンスキーさんの名前は覚えているでしょう。彼女は現在住んでいるカナダのトロントから参加しています。彼女は受賞歴のある映画製作者で、ドキュメント映画『道路脇で』(On The Side of the Road) はイスラエルでのナクバを突っ込んで追求した作品です。彼女はトロントでユダヤ人の子どもたちにヘブライ語で社会正義を教育するウィンチェブスキー・スクール (Winchevsky School) を経営しています。リア、久しぶりです。

リア・タラチャンスキー：お招きありがとうございます。

マーク・シュタイナー：オーレン・ジヴさんもイスラエルから参加しています。彼は写真報道で社会正義と闘い、イスラエルのアパルトヘイトを終わらせようと、仲間のフォト・ジャーナリストといっしょに「活動する写真」(Activestills) を設立した人です。彼はまた多くの新聞や雑誌に執筆しています。大変な毎日の中、参加してくださり、ありがとうございます。

オーレン・ジヴ：お招きありがとうございます。

マーク・シュタイナー：その大変な状況から話を始めましょう。私はこの状況の背景を知りたいのです。オーレン、あなたの最近の取材活動について話してください。

オーレン・ジヴ：この5週間、イスラエル南部、テルアビブ、エルサレム、西岸地区で取材活動をしました。イスラエル人とパレスチナ人にとって、10月7日以前と比べて状況は一変していました。

私の個人的体験として話しますと、10月7日は警報サイレンで目が覚めました。直ぐに南部へ車を走らせました。その道中で、これは今までのガザからの攻撃とは違うぞと感じました。私たちはこのような出来事をこれまで報道してきましたが、今回は単なるエスカレーション—私はこの言葉が好きではありません—ではなくて、もっと大規模だと思いました。

ハマスの攻撃から数時間後に南部に到着しましたが、今回はこれまでとは何か違うものだと気づいたのです。警官も軍隊も姿が見えず、イスラエルの油断を突いた奇襲でした。死体があちらこちらに転がっていました。20年間イスラエルとパレスチナを取材してきた人間として、イスラエル側と同様に、ガザにも優秀な救急隊と緊急部隊がいることを知っています。死体が道路に何時間も放置されているので、当局が事態を把握していないのが分かりました。

数日後にはハマスの襲撃されたコミュニティに入り、民間人が組織的に殺害されているところをじかに見ました。それから数週間は、人質に関するイスラエル政府の態度、人質を取り返せという人々の政府への要求、イスラエル政府に対する民衆の非難、とりわけパレスチナ系のイスラエル国民への厳しい対応などが高まるなかでの取材になりました。言論の自由の制限や大量逮捕、停戦や児童殺害の停止を要求する人道主義的デモに対する警官の弾圧が顕著になったので、それを取材しました。

2005年以降はイスラエルのジャーナリストのガザ取材がイスラエル政府から禁止されていました。現在は国際ジャーナリストもガザ入りを禁止されています。それで私たちはガザ回廊北部の状態を国境あたりから取材しました。危険を覚悟で耐え難い状態の中で活動しているジャーナリストから話を聞きましたが、言うべき言葉が見つかりません。

マーク・シュタイナー：リア、何か言いたそうですね。

リア・タラチャンスキー：オーレン、あなたが言っていることを分析する前に、起きてい

る事柄そのものについて話し合いたいです。一步引いて考えてみたいのです。この5週間においてイスラエルとパレスチナの外では、主張やプロパガンダではなく実際の事実、全体像、信頼できる現地報道へのアクセスの点で、メディアはますます大きな問題に直面しています。ちょっと10月7日以前での報道について考えませんか。当時はジャーナリストとしてのあなたの取材活動はどんな風でしたか。

オーレン・ジヴ：10月7日以前もイスラエル・パレスチナの政治的・社会的問題を取材していました。その数か月前には、ネタニヤフとその極右政府が推進していた裁判所の力を弱める「司法改革案」に反対する運動を集中的に取材しました。しかし、この1月に極右ネタニヤフ政府が発足して以降は、以前からあった入植者の暴力事件、パレスチナ人コミュニティの破壊と追放などが西岸地区と東エルサレムで日常的になって、そのために占領と入植地に対する抗議活動が激しくなり、それらを取材しました。

リア・タラチャンスキー：私がイスラエルでジャーナリストとして働いていた頃も多くはジャーナリストはこの紛争を取材して報道していましたが、あなたのように多方面にわたって、直接現地へ足を運んで取材する人は少なかったです。そういう意味であなたはユニークな人です。あなたは現地報道を大切に考え、あらゆる場所に足を運びますね。どのようにして取材活動をしているのですか。あなたの典型的な一日の動きについて、お話していただけますか。

オーレン・ジヴ：ええ、長年そうしてきました。いろいろなコミュニティ、いろいろな活動家、いろいろな研究者、いろいろな団体と接触しました。現場に出向いて人々とじかに会って話を聞き、理解することが大切です。大手メディアの記事になる前の現地の状況や雰囲気記録することが大切です。たとえ写真に撮って記事にならなくても、現地で人々に接触する中でたくさんを知り、理解できます。現地では状況が毎日変化しているのです。デモやその他の抗議の取材だろうと、日常生活の報道だろうと、現場へ出来るかぎり出向くことで多くを学べるのです。私の記事や972マガジン¹は現地取材から成り立っています。現地で見ると小さな変化が大きな政治的变化に発展することがあるのです。

マーク・シュタイナー：お二人に尋ねたいのですが、現在起きていることは過去とは異なっているように思えます。そうでないと言うなら、私や視聴者たちをそのように説得してください。ガザの破壊、今や11,000人、それも70%が女性と子どもたちが殺され、誰が瓦礫に埋まっているかも分からない悲惨な状態です。しかもイスラエルでも1,500人以上の人が殺害されました。イスラエルの右翼原理主義的政府が解放勢力によって攻撃されたのですが、その解放勢力もかなり民族主義的なイスラムに類似するような原理主義者なのです²。

それに、新聞などで報道されているように、イスラエル国内の国民弾圧、反戦運動の弾圧、国民や国際世論が訴える停戦をネタニヤフとその政府が拒否する姿勢など、現在進行している状況を考えると、私がこれまで知ってきた戦争と違うように思えるのです。リア、あなたはどう思いますか。

リア・タラチャンスキー：外から見るとこれは規模の点で大洪水のように破局的に感じられます。私が現地取材した最後の戦争は2014年の「境界防衛作戦 (Protective Edge War)」と呼ばれたガザ戦争です。そのときもこれは最悪だと思いましたが、今回の戦争は、ガザの未曾有の破局的な人道危機を作り出した点と、イスラエル国内で政府や様々な団体が反戦や抗議運動やイスラエル人民を結合しようとする運動を弾圧するファシスト的動きと

¹ 2010年に972人の作家が立ち上げた左翼的ウェブ・マガジン。

² ハマスをネタニヤフのユダヤ教至上主義の宗教シオニストと似たイスラム狂信主義集団とするのは、西側世界のオリエンタリズムと思われる。

連動しているという点で、2014年戦争をステロイド剤で大強化しているように感じます。

イスラエルの外から見ると、これまでのガザ攻撃を大幅にエスカレートしているように思いますが、オーレン、イスラエルの中ではどう感じていますか。

オーレン・ジヴ：ええ、イスラエル社会でも今回のガザ攻撃はこれまでとは大きく異なっていて、はるかに過酷なものだと感じています。ガザの人々がどう見ているかは私の立場では話すことができませんので、イスラエル側での視点から話します。

政治的信条の如何にかかわらず、これまでほとんどのイスラエル人は、政府が汚職や賄賂で墮落していても、また、政府が何を重視し何を画策しているか分かっているにもかかわらず、基本的にはイスラエル国軍が必要な場合は国民の命と生活を守ると思っていました。だから数十億ドルの金を費やすガザとの戦争を支持していたのです。しかし、10・7でそれが間違いであることが証明されました。この考え方が根本的に崩れてしまったのです。

イスラエル人、私たちの友人や知人たちは家の中の安全な場所に12時間以上も身を隠して、救助を求めましたが、誰も救助に来ませんでした。この日もその後も助けは来なく、人々は国がないと思ったほどです。やがて市民ボランティア、主として反ネタニヤフ活動家が食料や避難所を提供するなどの救援活動をしました。イスラエル人にとってこれは大きなショックです。ユダヤ系イスラエル人にとって1948年以来の最大のショックでした。

このことから政治的変化が起きればいいのですが・・・／

そういう変化は起きないでしょう。でもこのイスラエル人の感情は理解すべき重要なことです。残念なことに、この感情に基づいてガザへの報復行為、毎日報道されている野蛮な行為が行われているのです。

私はハマスやイスラム戦線の襲撃の犠牲者や人質になった人の親族や友人を取材しました。人質になった人がいる家族は240家族で、犠牲になった人は1300人で、その親族の全部とは言えませんが、少なくとも何人かが「はっきり言いたいのは、私たちの名前で報復やこれ以上の人殺しをやって欲しくない」とはっきり言いました。この人たちはガザの無差別爆撃、子どもや女性や男性など民間人虐殺に反対しています。それが第一番です。

第二番目の彼らのメッセージは、誘拐されたり殺された家族や親族が信じていたことだと言っていますが、長期的には政治的、外交的解決が必要だということです。私とは異なる言葉で表現していますが、軍事力増強や分離壁の強化のようなやり方は本当の安全をもたらさない—特に彼らにとっては—と言っています。彼らはこれまでの物語の変化、イスラエルの思考の変化を呼びかけています。残念なことにその声はほとんど報道されません。メディアは犠牲者の親族をインタビューしますが、報復や第二のナクバや私が口にしたくないような残酷な仕打ちを叫ぶ声だけが報道されます。ネタニヤフは国民の安全を確保できなかったことの原因をとりとうとしていません。それは戦争が終わってから議論しようと、彼は言っています。責任問題を避けるために、彼はこの戦争を数か月、いやもっと長く続けるでしょう。人々はネタニヤフが自分を救うことと現在の緊張状態を持続するために戦争を長引かせるのではないかと心配しています。

マーク・シュタイナー：今後どうなるとお二人は思いますか。つまり、お二人はすべてを目撃している・・・。

リア・タラチャンスキー：今後どうなるかを話し合う前にあなたが言ったことについて、もう少し議論しましょう。

マーク・シュタイナー：どうぞ。

リア・タラチャンスキー：申し訳ありませんが、マイク、どうすればあなたの注意を引く

のかわからないので、私はただ……。10月7日に起きたことに関して、西側世界でかなり多くの陰謀説やデマが出回っています。あなたもご存知のように、パレスチナの中で起きていることについてイスラエルはデマを流します。パレスチナに関する情報は、完全に遮断されるかフェイク・ニュースばかりになっているのが、ほぼ常態になっています。同じように、10月7日に関して西側世界では陰謀説が出回っています。その大きなものの一つは、10月7日で死んだイスラエル人犠牲者は襲撃下ハマスやイスラム聖戦によってではなく、イスラエル軍によって殺されたというものです。オーレン、あなたは当日現地にいたわけで、また、犠牲者の親族や友人と話したのでしょうか。この種の陰謀説をどう思いますか。

オーレン・ジヴ：質問していただきありがとうございます。重要な問題ですね。私は、音楽祭を含め五か所以上の襲撃されたところを訪れました。数十人の目撃者や救急隊員をインタビューし、全部ではないが記録映像も見ました。それから判断して、民間人は間違っ
て殺されたのではなく、最初から攻撃目標であったのは明らかです³。家の中、安全なはずの家の中のベッドで死んでいる死体も見ました。生々しく描写するつもりはありませんが、
事実は事実です。事実の否定は正しい分析や議論の妨げになります。

ええ、誤報やフェイク・ニュースはたくさんあります。何人かのイスラエル人、ハマスが占領した村のイスラエル人がイスラエル軍の爆撃で死んだのは確かです。それはイスラエル側が発表した報道でも、現地の人の証言でも明らかです。その数は明らかではありません。今後の調査が必要でしょうが、やむを得ない事情で調査には時間がかかりそうです。

誇張報道があるようですが、基礎的な事実は、イスラエル民間人の殺害はハマス戦闘員による殺害に加えて、機に乗じてイスラエルへ侵入したガザのパレスチナの民間人による殺害もかなりあります。親パレスチナ派にとっても親イスラエル派にとっても聞きたくない情報でも、事実を事実として伝えること、主流メディアの報道に影響されずに、その事実の背景も含めて、何故こういうことが起きたのかを、正直に伝えることが私の義務だと思っています。

マーク・シュタイナー：あなたが報道した双方の民間人殺傷の事実を考えると、これは二つの軍の衝突ではないですね。ガザで殺害されたパレスチナ人の72～3%が女性と子どもで、2万人以上が負傷、ガザでほとんど機能していない2、3の病院は怪我人でいっぱい
です。イスラエルでも、家の中、キブツ、音楽祭で殺害された民間人がいます。それに加えて、右翼のファシスト政府の弾圧で2800人のイスラエル人が負傷しています。それらを考えると、これはこれまでとは異なると思います。1948年のナクバに戻らなくても、1956年の第二次中東戦争や1967年の第三次中東戦争を思い出します。一体今後どう進行するのでしょうか。イスラエル人としてあなたはどう思いますか。

リア・タラチャンスキー：ガザと西岸地区への影響は恐ろしいものになるでしょう⁴。私はイスラエルのことを述べます。オーレンの言ったことで2点重要なことがあります。一つは、10月7日以前のネタニヤフの汚職とそれに対して「司法改悪」という政府の反応に対する抗議運動で、政府への信頼がいつそう落ちた。その上10月7日の事態によって国軍がイスラエル国民の安全を確保していないことを暴露され、棺桶に釘を打ち込んだ。少

³ ガザ周辺の地はガザのパレスチナ難民の先祖の村だった。イスラエルはそこに外国からユダヤ人を集めてきて、キブツや村に住ませ、パレスチナ人の帰還権に対する人間の盾として配置した。それをパレスチナ人が攻撃目標にするのは当然で、民間人殺害云々の議論は、イスラエル人がこれを一般的な戦争と見る議論である。

⁴ ガザの民族浄化に成功すれば次は西岸地区の民族浄化、その次はイスラエル国内のパレスチナ人の浄化になる、というのがパレスチナ人活動家の予想。

なくとも私にはそう見えます。

政府が危険きわまる極右政権なので、国民が政府を信頼しなくなったのは、それ自体はいいことなのです。しかし、国民の大多数が政府を信頼しないのは、日々の生活の持続という点からみると、危険な状態です。その危険な状態は現在すでに現れています。民間人による武装した軍事組織を、極右政治家イタマル・ベン・グヴィル (Itamar Ben Gvir) やその他の右派宗教シオニスト議員がカネを出して組織して養成し、イスラエル軍が訓練する民兵軍団の出現です。彼らがイスラエル内パレスチナ人国民に何をするか、それは神のみぞ知る、です。

2009年にネタニヤフが政権を獲得してから、反対者への弾圧強化、言論の自由の制限、市民的抗議の権利制限、ユダヤ教以外の宗教の自由の制限、ファシスト活動の増加、政府内でファシズム傾向の増加が顕著になりました。現在戦争を口実にして、今述べたような傾向がますます強まっています。それについてオーレンが何か話してくれるでしょう。

パレスチナ系イスラエル国民について、ネタニヤフ政府を批判するイスラエル人について、話してください。政府批判者が大量解雇された、あるいは政府批判を SNS にポストした人たちや政府の戦争を非難した人たちが逮捕されたといううわさが流れています。司法改悪、抑圧的法律、民兵のような政府外のファシスト軍と絡んで、今述べた傾向が展開しているイスラエル社会の状態を説明してください。

オーレン・ジヴ：多くのイスラエル国民は10・7襲撃にショックを受け、悲しみ、犠牲者の葬式などに忙殺されています。しかし、西岸地区の過激派入植者、警官、司法関係者は、すでに2021年5月の東エルサレムにおける民衆蜂起⁵とそれに連動したイスラエル内パレスチナ人のデモなどのような抗議に対して、普段からそれを弾圧する備えを固めているようでした。だから、あらゆる形で報復をやっています。入植者はいつものパレスチナ人コミュニティへの嫌がらせや攻撃をエスカレートさせ、とくにイスラエルの直接支配下にある C 地区では酷いようです⁶。入植者達については自分たちの狼藉行為は誰からも咎められず、警察と軍は入植者の味方ですから、好き放題をしています。彼らの多くはイスラエル国防軍の予備役兵です。武器も支給されています。ですから彼らは軍人としてパレスチナ人コミュニティに入り、そこからパレスチナ人を追い出しています。私の取材では13のコミュニティの人たち皆が追い出され、5、6のコミュニティからは住民が部分的に追い出されている状態で、この数週間で800人のパレスチナ人が追放されています。数字的には小さく見えますが、漸進的民族浄化という戦略という点で西岸においては重要な意味があります。西岸地区をバラバラの地区に分割し、もちろんパレスチナ独立国家樹立を事実的にも理論的にも不可能しているのです。軍はパレスチナ人をもう150人以上も殺害しています。一方、入植者のパレスチナ人殺害事件は9件ありました。これらは記録されていますが、その責任追及はありません。

一方イスラエルでは、警官が事実上民衆の言論の自由権を潰しています。今日、民衆が政治的逮捕に抗議して静かな祈りの会をテルアビブで行いました。今朝は、パレスチナ系国民、イスラエル内パレスチナ人コミュニティの指導者、元議員のパレスチナ人がナザレで抗議集会を開くのを、警官が止めました。そして、6～7人を逮捕しました。テルアビブのお祈りの会では、政治的な拘束に抵抗する18人の活動家を逮捕しました。一切のデ

⁵ ハラム・アッシュアリーフへのイスラエル人や入植者の乱入に抗議するパレスチナ人とイスラエル治安部隊との衝突。

⁶ 西岸地区はA,B,Cの三地区に分類されている。A地区(西岸地区の18%)は一応自治政府(PA)が行政と治安を管轄するが、B地区(22%)では行政はPA,治安はイスラエル、C地区(60%)は行政も治安もイスラエル管轄である。

モヤ会合、停戦要求、暴力を辞めようという訴えなど、言論の自由を守れという要求など、一切の活動が取締りの対象となっているのです。

政府はどんな抗議や要求活動をも許さないのです。それをはっきり宣言し、最高裁もそれを認めています。今日、テルアビブの警察署長がデモに対して、今は戦時中だ、デモは許さないと言って、そのため表示物を持っていようと持っていなくても、反対を叫んでいようとなくても、道路に立っている者を片っ端から逮捕せよと、警官に命じました。言論の自由の問題どころではありません。パレスチナ系のイスラエル国民には言論の自由なんかありません。逮捕だけでなく、SNSにアラビア語でポストされたものは、すべて犯罪行為になるのです。政治状況やガザに関して、アラビア語で書かれたものは、すべて犯罪とされるのです。

実際、すでに200件以上が調査され、54件が犯罪として裁判にかけられています。犯罪者とされるのは、10・7襲撃に共感とか支持を表明した人からイスラエルのガザ攻撃で民間人や子どもの殺害に反対する人まで、ガザの人々に同情したり連帯を表明する人です。当局はネットのアラビア語を徹底的に調べて、犯罪を立件しようとしています。現実には裁判は進行していませんが、その抑圧効果で人々は沈黙し、デモも少なくなりました。仕事を解雇されるという恐怖もあります。実際、解雇や大学の教職から追放されたり右翼から命を狙われたりしています。

戦争国では言論統制はよくあることですが、今イスラエルで起きていることはまったく異質です。人々は本当に自分の意見を言うのを恐れているのです。私はパレスチナ系イスラエル国民をインタビューしました。息子が医者で、イスラエルの南部でハマスに殺された家族です。南部で人々を救う仕事をしていたパレスチナ系イスラエル国民で、ハマスに殺されたのです。遺族にその話を聞いた後で、政治的なこと、ごく一般的な政治的なことを尋ねました。彼らは話しませんでした。「息子を殺されたとはいえ、私たちはパレスチナ人なので、いつでも逮捕されます」と言いました。この恐怖はアラブ系の人々の中に一般的にあります。彼らは怖がって外出しません。今晚、昼間のテルアビブやエルサレムで停戦要求や政治的逮捕の禁止を呼びかける人々が逮捕されるテレビ・ニュースを見ました。極右入植者がガザの完全占領とパレスチナ人をガザから全部追放し、ガザを入植地することを要求する集会を開いたのを見ました。

極右入植者の集会には解散命令が出なかったし、誰も逮捕されませんでした。極右入植者は戦争犯罪をせよと叫んでも、自分たちが西岸地区で戦争犯罪を行っても、罰せられないのです。平和と共存を呼びかけ、パレスチナとイスラエルの両者に暴力の停止を呼びかける人々は逮捕されるのです。こういう傾向は前からありましたが、それが急激に増加しているのです。

私が心配しているのは、いったん奪われた市民的権利は、この戦争、このエスカレートが終わっても、戻ってこないのではないかと、ということです。政権の座にいる狂気の極右やそれと繋がる入植者や右翼の態度は、ガザ戦争が終わっても変わらないでしょう。それに彼らがいつガザ破壊をやめるかは定かではありません。それが終わったとしても、ガザの破壊的状况は何年間も続くでしょう。右派や政府はガザの破壊的状况を利用して、いつまた今回のような攻撃があるかもしれないとして、政府批判運動を禁止し続けるでしょう。

マーク・シュタイナー： あなたは取材活動をするあなたや他のジャーナリストの身の安全について話しました。イスラエル内部での安全のことです。言論の自由や取材活動の自由という点で、あなたや他のジャーナリストがどのような経験をしていますか。

オーレン・ジヴ： もちろん、ガザでもジャーナリストが軍の攻撃で殺傷されています。仲間のジャーナリストとの会話では、安全なところは何処にもないと言っています。過去の紛争では、イスラエル軍は国際報道機関の事務所をマークして、そこに爆弾が落ちないように

に計らっていました。今は、軍はメディア事務所を爆撃し、取材を嫌ってジャーナリストを標的殺害します⁷。2021年5月にAP通信の事務所があるガザの建物をイスラエルが爆撃したことがありましたが、一応ジャーナリストに危害を加えない努力みたいなものが、以前はありました。今はこれが完全になくなって、ガザでイスラエル軍の攻勢を取材しているジャーナリストや、耐え難い状況の中で取材活動をしているジャーナリストから恐ろしい目にあつたという話を何度も聞いています。イスラエル内部では、パレスチナ人ジャーナリストにとって非常に危険な状況になっています。右翼からだけでなく一般のイスラエル人からも攻撃されています。人々はSNSやアラビア語チャンネルを監視して、気に入らないことを言うリポーターを攻撃します。

その上政府はアル・ジャジーラやイスラエルに批判的なメディアを抑圧し、放送禁止にしようとしています。だから、ジャーナリストはSNS利用はもちろん、通常の基本的活動をするのも怖がっています。私たちジャーナリスト仲間は、西岸地区やイスラエル南部を取材するときは、みんな一緒に集団行動することにしています。10月7日、襲撃を受けたイスラエル南部で取材活動をしているときにパレスチナ人民兵の銃弾にあたって死亡したジャーナリストが2〜3人いましたが、その後は、イスラエル内部で、デモや政府批判集会を取材するジャーナリストが極右民兵に襲撃される事態になっています。極右はメディアを攻撃目標にしています。彼らは言論の自由が嫌いなのです。

マーク・シュタイナー：ジャーナリストへの迫害や言論の自由など市民的権利の破壊はよくわかりました。でも、ガザの絶対的な破壊に目を向けましょう。人々はイスラエルとの国境からどんどん遠く離れた奥地へと押しやられています⁸。西岸地区でもパレスチナ人が住んでいるところから追い出されています。追い出した跡の地を入植者が奪うでしょう。それと並行してジャーナリストへの抑圧も進行しています。こういう事態は、私たちが過去に経験したことと大きく異なっています。非常に暗い未来を予測させる徴候です。ファシスト民族主義政権が強くなり、反対の声がはっきりしません。今後どうなるのでしょうか。あなた方の意見を聞かせてください。

オーレン・ジヴ：残念ながら、あなたの言う通りで、近未来は暗いです。イスラエル国民も世界の国々もイスラエルがガザと西岸地区でやっていることを止めようとしていません。事態は混沌としています。イスラエル政府はこの戦争目的を公式に表明していませんが、ガザのパレスチナ人を全部シナイ半島へ追い出すという第二のナクバが噂されています。エジプト政府はこれに猛反対し、シナイ半島に難民キャンプを作らないと言っています。しかし、イスラエルの一般民衆も、戦争では勝ち負けや捕虜や難民は当たり前で、兵士だって毎日死んでいるのではないかと言っています。本当にナクバがこの争いの大詰めになるのでしょうか。

私は倫理問題とか、ハマスを殲滅するという実際的问题を話しているのではありません。ハマスを退治したからといってどうなるのでしょうか。ネタニヤフ極右政権は西岸地区とガザとの分離を前々から歓迎し、その意味でパレスチナ自治政府（PA）と対立してそれから分離する過激派ハマスの存在を喜んでいたので。イスラエル・パレスチナ問題の外交的・政治的な解決の道を防ぐためです。戦争状態を継続したいのです。反ネタニヤフ運動をしている人々も、対パレスチナ戦争で予備兵的存在です。

しかし、反ネタニヤフ派の人々が、パレスチナとの戦争だけでなく、イスラエル内部にも政治戦争があり、その戦争目的、それがいつ、どのように終わるかを意識的・組織的に

⁷ とりわけ、アル・ジャジーラの記者は狙い撃ちにされている。

⁸ イスラエルは南部へ避難せよと通告して北部やガザ市へ進軍したが、その南部は空軍の爆撃で破壊されている。「避難通告」は国際社会向けのジェスチャーであった。

考えるようになればいいと思っています。近い未来、これまでよりも大規模な反ネタニヤフ運動が起きると、私は思っています。

それから、10・7でイスラエルの軍備体制、分離壁、サイバー・セキュリティだったのが露呈したので、そういう武力以外の方法でガザとの国境付近で生活している人々を守る方法を求める声が、イスラエル人の中から出てくることを期待しています。期待薄な望みですが、人々がそれに気付くことを望んでいます。

武力以外の道の選択を、イスラエル人とパレスチナ人の双方に望みます。こんな酷い大規模な破壊があったのだから、そこから武力以外の解決の道が生まれてくることを希望しています。

イスラエル側のことを話しますと、大多数のイスラエル人が暴力を選択したのは、非常に残念です。10・7のハマスの恐ろしい攻撃があったのだから、理解できる反応ですが、人々が暴力の連鎖の中で生活することに慣れ、やられたらやり返すことを当然と思うようになってきているのは、残念です。だからこそ、ガザからパレスチナ人を追い出す第二のナクバの声が聞かれるのです。

政府はもちろん、一部の国民も、ハマ스에捕らえられた人質のことを忘れるかあきらめているように思えます。5週間経つのに、ハマスが求める捕虜交換の話が出ていません。私は右翼に捕虜交換に関してインタビューしました。彼らは、5000人のパレスチナ人政治犯を人質と交換に釈放することを支持すると言いました。

政府が人質の命より戦争続行を優先しているのです。こんなことは初めてです⁹。

マーク・シュタイナー：最後に、リア、あなたの意見を。

リア・タラチャンスキー：ガザの人口の大多数は難民と、1948年のナクバの難民の子孫たちです。そのガザでの難民たちの家、地域がイスラエル軍によって標的にされ、徹底的に破壊されて、再び他の場所へ追い出されています。ナクバでパレスチナ人が追放された村や町の大部分は、空き地になっている。それらの場所には町がありません。この戦争が終わったら、一番まともな唯一のものは、難民に故郷への帰還を許し、神政政治を廃し、本当の民主主義をイスラエルに導入することです。

イスラエルの政治システムの根本的変革とパレスチナ難民の帰還の実現が、私の意見です。それこそが、イスラエル政府が絶えず言っているハマスの「壊滅」の唯一の道です。しかし、そのために何もしていない。それこそが、いわゆる「暴力の連鎖」を終わらせる唯一の道であり、それがイスラエル政治権力の脱植民地主義化なのです。

マーク・シュタイナー：そして、次に何が起こるかを楽観的に考えようと必死になっているが、それは本当に難しい。私もあなたがおっしゃった道が唯一の解決策だと思います。でも、あまり楽天的に考えられる未来ではありませんね。そして、殺された1万人のガザの人たちと、殺された5人のイスラエル人を見てみると、ネオファシストで専制主義的な政権がイスラエルを支配しているので、パレスチナ以外のところで人殺しが行われるようになるかもしれません。それはとても恐ろしい瞬間だ。本当にそうだ。

リア、オーレン、今日はありがとうございました。これまでもいろいろご協力をいただきましたことを併せて、お礼を申し上げます。君たちの仕事は驚異的だ。私たちは、あなた方2人の作品をつないでいくつもりだから、みんなは2人がやっていることを本当にチェックすべきだ。あなたの記事や文章は私を感動させ、私が送った人たちをも感動させた。信じられないような仕事だ。そして、あなたが今イスラエルで行っている活動を立ち上げ、

⁹ カタールの仲介で、短期間の停戦と捕虜交換が実現した。イスラエル政府は「イスラエルの政府と国防軍、保安当局は、すべての人質を取り返し、ハマスを壊滅を完了し、ガザからのイスラエル国家への新たな脅威をなくすため、戦争を継続する」と声明を出した。

実行した勇気に感謝します。イスラエルではもう夜中だし、明日も長い一日でしょう。お二人の活躍のさらなる発展を希望しています。

リア・タラチャンスキー：ありがとうございました。

オーレン・ジヴ：ありがとうございました。

マーク・シュタイナー： 今日もお集まりいただきありがとうございます。また、リアとオーレンにも改めてお礼を申し上げます。イスラエル、パレスチナは本当に遅くなりました。そして、この番組を運営し、編集し、放送を盛り上げてくれたキャメロン・グラナディーノとデビッド・ヘブデン、舞台裏ですべてを動かしてくれたケイラ・リバラのたゆまぬ努力、そしてこの番組を可能にしてくれたリアル・ニュースのみんなに感謝します。

そして、ご意見をお聞かせください。mss@therealnews.com。今後数週間のうちに、もっと多くのことをやっていくつもりです。私たちはこれを手放すつもりはありません。手紙をくれたら、すぐに返事を書くつもりです。そして申し上げたように、私たちはパレスチナとイスラエルについての取材を続けていきます。本日はありがとうございました。皆さんとご一緒できてよかったです。